

# 非暴力直接行動

NO. 142 '86 12/31

発行・WR1(ウリ)水田ふう・大阪市あべの区旭町1-6,1-1307(647-4089)

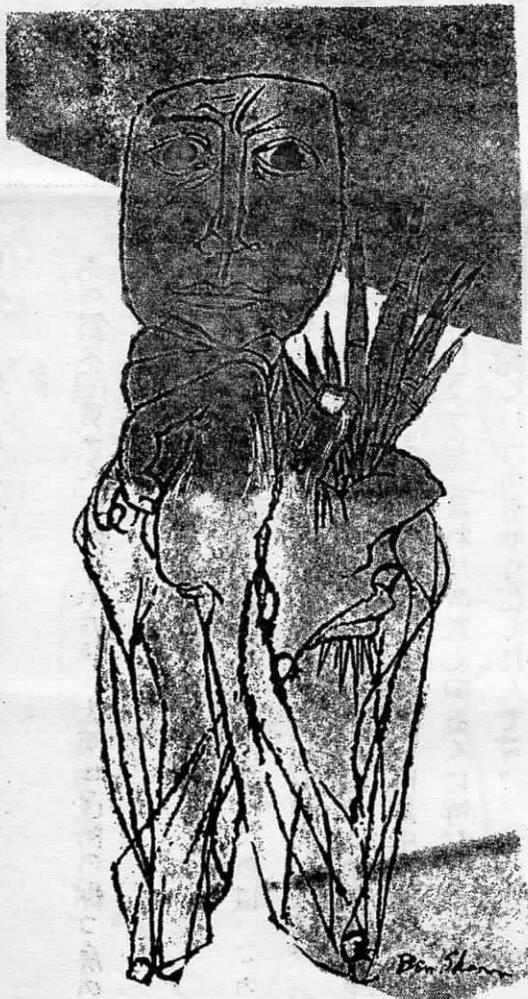
WAR RESISTERS' INTERNATIONAL-JAPAN

## なんで死刑廃止か

もう10年前になるんですが、鈴木国男さんという人が大阪拘留所の保護房で殺された。という事件がありました。

2月1日に殺人未遂ということで逮捕され、2月16日に死体となってお母さんに引きあわせられるんですが、このたまたま16日向で鈴木国男さんの体重は十何キロも減り、全身2ヶ所近くの打撲や挫傷のあとがはっきりと

水田ふう



これは9月のあと10月19日九州の海で念でしゃべったもの。下書きの原稿をあまり改訂できぬままです。しんもの。ガラガラ文章でよみにくくすみません。メモみさいなもの。

のこっていて、見るも無惨な姿になっていたので。

★

私が田舎から東京に出るまですべのころーもうは母も前ですが、新宿の地下広場では、毎日ベトナム内戦のフォークデリラうたがそこをのりこいて、私もそれに加わろうと出かけてい、たんです。すると、そこには山谷の労働者たちもきていて、横断幕をひるげて、うたを配っていました。私は彼らの許之に強い衝撃をうけたんです。私は山谷の存在を知らなかったんです。フォークデリラには加わらないで、私は彼らのうたをまくことにしました。そして、次の日、山谷でうたをすゑていこうで行、たんです。

玉権公園に、私一人でおもいごとと坐っていると、頭の上にはわりとヘルメットをかぶせる人がいて、後をふりむくこと、音がきいて、かっしりした体の人で、「どこからきたの？」って聞くから、「どこ」というわけじゃなく、「一人できたの？」っていったら、「じゃあ、ほくと同じだね、ほくは茶酒蒸煙一人同盟だよ」って、とっつてもやさしそうに笑、た人が鈴木国男さんで、それが彼との最初の出会いだったんです。

彼は、当時、山谷合同労組の書記長だったのです。

★

あの鈴木国男さんが殺された。大阪拘置所の保つぎのなかで……

……

私が監獄問題に積極的に近づくとことになったのは、この鈴木国男さんの事件が直接のひきがねになっています。

といっても監獄と四つにが、取り組むほどの力も度胸もなかったので、おっかなびっくり、まずは獄中に図書を通して入れをわらうと、まわりの友人五人に呼びかけて「たんぼ図書館」というのをやりだしたんです。

図書の差し入れだけというものすごい限定つきの救援ー救援ともいえないようなものだけど、それでも獄中の人に、とって、たんぼ図書館は、なんとお金のひびきのようなあたたかいかんじがあたんでしようね。とても歓迎されたんです。特に、「刑事囚」の人たちから。

獄中の人で、救援体制を持っているのは、政治囚とヤクザです。

一般刑事犯といわれている人は、家族にも友人にも見せたら

れてる人が多く、夏に捕まったら、夏服のまま冬をむかえなければならぬといった、その日の日用品を買うのにも困るという人が非常に多いんです。

私たちは、毎回発行のたんぼ新聞というのを出してたんですけど、それは、カットがいっぱいあって、平仮名の多い文章で、つくってるのが女たちだったので、その奥の奥の奥が、あつて、政治囚の人にはバカにされたんだけど、刑事囚の人には、これが喜ばれたんです。

囚書の貸出しといつても、実際には政治囚の人たちが読みたいような本はあんまりないし、それはそれぞれの救援会がやってるし、そうかといって、刑事囚の人たちが読みたい大衆小説とかマンガとか週刊紙とかもそろってなくて、まことに中途半端な図書館で、もっぱら、この新聞と手紙のやり取りがおもな仕事になってい、たんですけど……  
そういう、ささやかな、やりとりを通じて、それでも獄中というのがどんなもんであるのか、そこに入れられているのはどんな人たちであるのか、ということが私たちにたくさん見えてきました。

憲法に高らかに「基本的人権の享有」というのがうたわれてあって、国民は、すべての基本的人権の享有を妨げられない。この憲法が国民に保障する基本的人権は、侵すことのできない永久の権利として、現在及び将来の国民に与えられる。——と書いてあります。

しかし、獄中で見る限り、基本的人権などあったもんだはありません。

私は、その国に基本的人権があるかどうか

を見るのは、その

国の監獄において

基本的人権が保証

されているかど

うかわかる、

と思います。

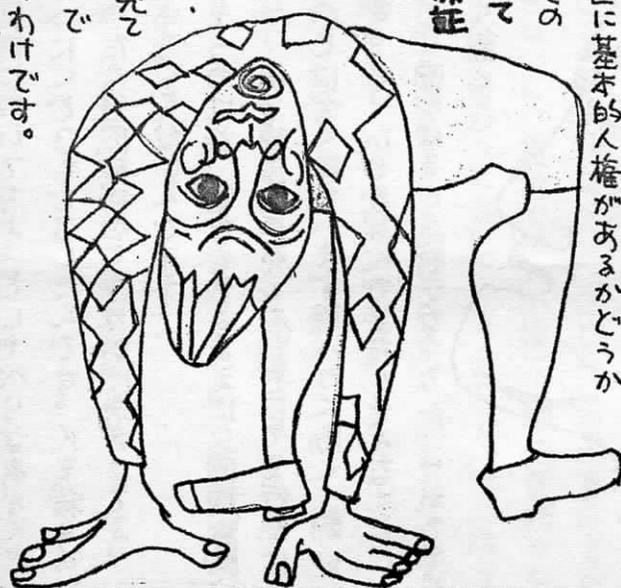
その国がどんな

国であるのか、

それは獄中を見て

みれば、一ぺんで

わかる、というわけです。



そのころ、たんぼぼと連絡のあつた死刑囚は、四五人いたと思うんですけど、特に死刑について考えたということはない、たんです。

たんぼぼができて一半年ぐらいの時に、集会を計画するんですけど、この時、講師を誰にたのむかということになって、監獄とか、囚人とかやうと、日頃いっしょにやつてる私たちのまわりの女たちにとつても関心になりにくいので、丸山友岐子さんを呼べば、女の人たちがたくさんくるんじゃないかということとで丸山友岐子さんにまづまづいきました。

丸山友岐子さんは、そのころ「愛と性のリレー」というのを書かれていて、それが話題になってたんです。それよりもっと若い頃に書かれた「逆うらみの人生」という死刑囚・孫山ハサシのかかわりの記録はあまり知られていなかったんですが。

で、丸山さんを呼ぶということで、集会のタイトルが『死刑はあなたと無縁か』と、きめたんです。きまるとは偶然みたいな決まり方でした。

私はこのとき司会をやったんですが、司会のまえに、た

んぼぼとして、死刑についてちよつとしゃべらなあかんというところで、じつにじごもどろしたんです。人を殺すのはマカンことやったら当然死刑かマカンに決まってる、ともうそれ以上ゆうことないんですネ。

私はいつでもそうやけど、物事をやるまえに、向題意識があつて、そして、ある程度先の見とおしをたてて行動にふみきまというのとは全く逆で、まづ軽ハクに動く、動いてしまふ、さうすると、ひとがなんでおたくせんなことしてはりますのつて、困かほるから答えなマカン、それで考える、考えながら動く、動いたあとで考える、動くこと

かならず見えるものがある、というパターンなんです。でも今は、それを評価することにして



私の流義として、積極的  
いるんですが

この時もそうで、死刑制度ゆつのは、えらい向題やと特別に考えて集会したわけじゃなくて、たまたまのなりゆきだったんです。しかし、この集会での丸山友枝子さんの話は私にとっては目からうろこが落ちるようで、やっぱりそれが死刑制度について考え出すキッカ<sup>カ</sup>になっていきます。

丸山さんは「私は自分の肉体を死刑制度によって人質にとられていたような気がする。……ひとがひとを殺す時、その瞬間というのは、死刑制度があるからやめとこうとか、そういう余裕とか理性とか打算とかまるで働かない状況においつめられてやってしまふんで、そういうひとにとって、死刑制度は抑止力としては働かないし、殺してしまふような原因とか条件、状況があるかぎり、殺人というのとはなかならないと思う。そういう意味において、死刑制度は犯罪の抑止力にはならないということは一つの事実ではあるけど、私のように、一生、人殺しなめてようせん、犯罪ひとつだつて決しておかさんような小心な、圧倒的大部分の人向にとつては、死刑制度というのは、抑止力にもなっていない。人を殺したら死刑やというのは、潜在的な、私らに対する強迫観念としてつくりあげられてきている……」

私は、この話を聞いて、ほんまにそうやと思っただけです。死刑制度というのは、具体的な死刑そのものだけが切り離されて向題にされがちやけど、もうこれは文化そのものとして、私らのくらしのなかにまで定着させられている。権力の思想を代表しているもんや、と気がついたのです。

<sup>しかし</sup>私らは、一生死刑になるような犯罪は犯さへん、と云つても、直運転してる人だ。たら、いつどんな交通事故をおこすかもわからないし、最近では立小便でも軽犯罪法でしよ、びかれることが多なってるし、じやはりだつて、ステ貼りだつて、死刑を頂点とする刑法によって裁かれる可能性は、現実向題として、私らの日常身の回りにゴロゴロしているわけです。

今の世の中おかしから、ちよつと禰張つてじやまきしよう、ステ貼りしようと思つても、ヤバイから今回はやめとこか、とかなるわけです。

刑罰の思想は、たしかに私たちの行動のブレーキになっています。

★

死刑制度は、具体的に死刑にされる人の問題のように考  
えていたけど、そうやなしに、これは日々死刑制度とゆー  
もので強迫され続けている私ら自身の問題やということに  
気づかされたんです。

**死刑と私らの關係**というのには、まあ普通におとなしく暮  
らしてさえいれば、自分がそれに当たることは全く考えら  
れない。誰かが当たるとしても、教の確率からいって、も  
一億二千万分の三（今耳死刑にされた人の教）だ。そのこ  
とだけでいって、大人数の人間にとって全く關係のない  
ことにちがいない。しかし、たとえば自分の親とか恋人と  
か友人が死刑にされることを考えてみれば、いつ、ペンでわ  
かるけど、その時、自分は殺す側ではなくて、殺される側  
にされる側の立場に身を置くことは明らかだと思えます。  
私たちは、自分が死刑にならなくても、いついかなる時  
に**権力者になる可能性も、つまりはない** **本来的に殺される側**  
**に**なるといふことなんです。

で、死刑制度のことをもおちよっと本気でやろうと思う  
ようになって、**がたつむりの会**——死刑廃止関西連絡セン

ターなどにも加わるようになるんですけど、それで、たと  
えば署名を集めに行き、たりするでしょ。すると、意外な反  
応に出会ったんです。署名をことわられるんです。

私は、死刑反対とゆうのは、戦争反対とおなじで、小さ  
いころからずーと疑う余地のない、あたりまえのこととし  
て、リクツではなしに感情として感覚としてあった。

だから、たいがいの人もそうやと思ってたから署名をこ  
わられるなんて思っていなかったんです。それも街角で署  
名を求めたのではなくて、集会にいったの事なんです。

いっしょに反戦や反原発のデモをしたことのある人から  
「死刑はやっぱし必要やと  
思うわ」といわれて、  
ほんまに私はビックリ  
ぎょろ天、ショック  
でした。

それから、セクトの人  
とかもとセクトみたいな  
人からは、今の自民党政権の  
下での死刑には反対だけど、



新しい体制・すなわち人民の権力をうち立てたら、その時は死刑制度は必要やとゆうんです。反革命分子から革命政府を守るために。

それから、天皇や石井部隊の暴人みたいのはやっぱり死刑にせなあかんから、**死刑反対は云いきれない**。

いち番多かったのは、一応のたてまえとしては死刑制度に反対といしながら、個別の具体的な事件に出会うと、ちよつと考え直して、といつて逃げる。

**真アジア反目武裝戦線**メンバーに対する死刑反対の署名を算めた時も、死刑は反対だけれども……といしながら、**けれども**の後の方におしても力が入って、署名をしてくれな……

梅川さんという人が銀行においって人質をとって、たてこもり、耳をそいだとかなんとかスキャンダラスに週刊紙なんかに取りあげられた事件があったけど、こういう事件のあとでの署名というのは集めにくいんです。

いつか、映画「息子」の衝動殺人事件あつかったら、ごうまきに行った時は、死刑反対なんてゆうと、どつかれちゃうなかんじやった。

浅野健一さんがマスコミの起源とゆうのは、死刑が公開されるとき、その死刑囚についてあることないことスキャンダラスに書きたてたというのが、そもそも新聞のはじまりやったという話をされたんですが、なるほど、と思ひました。

**私たちが毎朝ひるげる新聞には、**三面記事にかならず犯罪事件が大きくとりあげられていて、今日は強盗、その日は強姦殺人、あしたは通り魔、またまたヤウガの流弾があつたとか、世の中強盗事件でみちみちているようかんじです。こういうのを毎日読んでいると、世の中ぶつとうでかなわな、市民の安全を守るために、警察にもっとしつかり取り締まらわなアカ、警察は何をしてるんや、早よ犯人を捕まえる、刑罰も、もっと厳しくして、あんな奴には死刑やーという具合になつてくる。

**特に女の身に叩いてゆつたち、**この世の中は暴力に満ち満ちているように見える。何しろ、女にとって、暴力とはほとんど男と同義語なんやから……

だから、この私たちの平穏な日常生活を乱し、破壊するものー犯罪者ーと自分との関係は常に被害者なんやという

恐怖感と被害者感情というものが、いつでも呼びおこされるものとしてあるから、犯罪報道にふれるたびに、やっぱり、身の安全を保障してもらおうためには、少々気にいらんことがあっても、国家・ケイサツ・権カーに身をまかせまじり仕方がないと思ってしまうのやないか。

この被害者感情と、ある時は自分があるで権力者になってこの世を治めるような立場で、「秩序と社会正義を守れ」という、裁く側と一体化しての加害者心理。それが一本の縄のようにないまざって体制維持、すなわち死刑制度存続の世論をつくりだしていると思ふんです。

しかし、實際ケイサツがどういうもんであるか、裁判というもんがどういうもんであるか、国家というもんがどういうもんであるか、一ちまっつつき合ってみれば、決して弱い者の味方でも救い主でもないということはすぐにわかります。裁判所が人を処罰するのは、ほんまにそんなときどきの権力の都合しだいなんです。



自分の恋人や親や兄弟が殺されたりしたら、そりゃ、あんな奴殺してやりたい。死刑にでもなんにでもしてうらみをばらしたいーと思うのは、まあ人情として当り前の感情やけど、裁判所は、その被害者の立場で死刑にするわけやない。その証コに「もう後悔してらんやし、今更死刑にしても殺されたもんが生きかえらわけやないし、どうか許してあげて」と遺族がたのんでも、その簡単に判決は変らへん。それと、子供の遊びでも、ままは死刑や」とかいって、カンタンに死刑とか口に出てるけど、殺人事件をおこしたらかならず死刑になるとはかぎらない。むしろ、少ない。それも裁判官によつてまちまちなんです。

同じようなケースでも死刑になる場合とそうでない場合がある。でも、誰かは耳に何人かはかならず死刑の判決を受けている。死刑判決を出した裁判長になせ死刑を出したかと聞いたら、出したくはないけど、死刑制度があるからこの場合出さないとはいかない、と答

えているんですね。

まあゆうたら、学校で生徒に点をつける時に五段階にラ  
ンクづけしなアカン。あれと同じりクツだと思っんです。  
ぜったい誰かをうにせなあかんし、誰かをうにせなあかん。

死刑制度がある限り、ぜったい誰かを死刑にせなあかん  
わけです。では何故「死刑制度」はあがるのか。

それは、どうしても死刑制度を**國家が必要**としているからで  
つまり死刑制度を残しておくため、死刑があるんです。

★

誰を殺すために死刑制度が必要かというところ、やっぱりそ  
れは國家と眞正面からこのことをかまえようとする政治犯に対  
して、どうしても國家は死刑を必要としているんだと思っ  
ます。

ソビエトで革命政權が誕生して、すぐに死刑制度は廢止  
されたんですが、すぐにまた反革命分子を処刑せなアカン  
というところで死刑制度が復活した。

(いまでも通常の犯罪に対しては死刑をやめていながら、  
軍事裁判—國軍犯—における死刑はのこしているという國  
がかなりあるんですね。國家とこのことをかまえるものに対し

この最大のらみとして、ごおしても死刑が必要というわ  
けです。

しかし、實際に日頃死刑制度の村敷にされて殺されてい  
るのは「**一般犯罪**」といわれている人たが、**身が**  
わりとゆうが**人身御供**、とゆうか、しすめ石とゆうか、市  
民一般に対するみせしめとして、死刑にされている。

ようするに、「死刑制度でもって私を日々おどかしつづ  
けている國家というのは、はっきりと私を敵視してい  
る」ということだと思っんです。

こう考えでいくと、はじめは**單純素朴**なところで死刑反  
村とゆうたけど、本まに死刑制度に反対する。と、このこ  
とは、國家なんてもんは私らには必要ないんや、裁判所も  
いらんケイサツもいらん、監獄もいらん、刑法もいらん。  
—私らのあいだでおこったことは國家の介入なしで、自分  
たち自身の問題として、自分たち自身の自立の問題として  
解決していくんや—ということにだんだん気がついてきます。  
やったんや、ということにだんだん気がついてきます。

これはえらいことです。ムズカしいことです。それわか  
ら池田浩士さんのように、「死刑制度反対とはよいわらん」

ということにもなると思うんですが、しかし、それでもなお、何度もくりかえしていいですけど、死刑制度と私たちの関係とゆうのは、殺される側の立場である以上、私たちにとって、死刑反対をいう以外の選たくはありえないのです。

★

最後にもうひとつ。世論調査なんかでも死刑賛成が圧倒的というけど、国民の世論がまず先行して、それで死刑制度ができたわけじゃない。

明らかに、それは国の政治の必要から、世論に關係なくつくられたもんや、ということ。だから死刑が廃止される場合にも(諸外国の例にみる通り)もっぱら国家権力の立場と利害によって、つまり、権力によってそれほど差しかえがなければ、世論に關係なく実施されることになる。  
(世論調査)  
100%の世論というけど、その大多数は、死刑制度が既にあるからそのもので、絶対的な数字とはいわれへんのかわないか。もうちょっといいないにその100%を見ていくと、積極的に死刑賛成を主張する強硬論者は、やっぱり十%もないんじゃないか。

それに対して世論調査にあらわれた死刑反対の10%は、はっきり死刑をやめさせようという10%で、その積極性がらいうたら、賛成派の教といい勝負。

このことは、死刑制度廃止の運動にかかわるものが、えらく少数・非力であつても、その一人一人の存在と行動が大きな意味としてあるということです。いまや世界各國のすう勢として、死刑は廃止の方向へとは、きり向つていいる。日本でもアムネスティからの勧告を受けたりして、数的に減少の傾向がでているとき(去年、今年とちよつと死刑判決・執行がめだつていますが)、日本の動向を転換させる一例えは、はかりの均衡がほんの少しでも変わるような一ものとしての役割にあると思ひます。



# 雑記 メモメモ

▼こんな話を聞いた。  
いま国鉄職員に對して  
勤務評定がされている  
んだけど、その採点基

準がなんと、①勤務中に組合の運動をしている。②勤務中に時々組合の運動をしている。③勤務中に組合の運動をしていない。そして④が、勤務中に組合の運動をしていないのを止める。—というのだ。私は、この話を聞いて、ワッ今は戦争中や、と突然思った。戦前、物を言っているような人が転向をせまられて、筆を折ることでギリギリの良心を保とうとしても、それは許されなかつた。積極的に戦争賛美の文章を書くことで、はじめて許された、という話を向井さんから聞いたことがあって、この④の項目はまさにそこまできているというのだと思つた。

分割民営化されて、まづ先に就職できるものは、もちろん④の入らなから、③は④になることを誓約せられるにちがいない。

▼NHKの番組終了後に、なぜか日の丸がなびき、君が代が奏そうされる。どうしてかというところ、あれは、国民の

圧倒的な支持を受けているからだそうです。NHK回答によくと、その証拠に、番組が延長したりして、たまに日の丸・君が代をやらない時があると、かならず電話がかかってくるそうなんです。もちろん、なぜやらへんかったかというきつい抗気の電話なんかやそうです。とすれば、こっちも負けずに電話をかけなければ、「なぜ今夜は日の丸・君が代をやるのか」ってね。

そこで、投書がループ・組織化の提案。

で、私、さうそく、ゆうべはえらく頭にきたので、久米宏ニュース・ステーションに電話をかけました。まるで、ケイサツと同じどころか、率先して張り込みしてスリを逮捕するなんていう仕事は、あなたの仕事ではないでしょう、ゆうてやりました。あなたもカチンときたらすぐ電話を、すぐ投書さ。一九八七年度の共同行動として—

▼先号で、虹の会でやった映画「白バラは死なず」を見て、「白バラとヤジ馬」という文章を書いたのだけど、あの時、私は受けつけをして出て入り入ったりでいていねいに見てなかつたし、向井さんは大山で見れなかつたので、こんどは映画館に二人でもういちを観にいった。そしてたら

ああ、もうちょっといいいに書けばよかったなあと思うところや、あ、このことも書きたかったなあ、というところが出てきた。で帰りに二人で飲屋に入って、いろいろしゃべりあった。その要点を列記すると――

① (「史を見定めること」) ハンスらを処刑したナチスは、三年後に滅んだ。「史は私たちにそれを教えている。だから私たちは、この時代状況の流れの方向がどう動くのかを見定めることで、「白バラの結末」を、いまは変えることが出来るのだ。

② (「アクセルとブレーキ」) 状況がきびしくなり、事態が切迫すると、かならず二つの傾向があるいは意見の対立が、グループ内で顕著になる。ハンスらにみられるラジカルな積極行動派と、途中でぬけていくAや、教授などの慎重派と。(しかし彼らもやはり稀々それ死罪にはなる)

そして大てい前者が(少数でも)説得力をもつ。事実、それなくしては行動をつくり状況を切りひらくことはできない。

だが、車にとってアクセルとブレーキが絶対不可欠であるように、運動内はこの双方が共存してこそ、大きな「カ」

なのである。(だから、どちらが正しいかの問題ではない。それぞれに正しく、それをどう行動に反映するかなのだ) ③ (「トレーニング」) ハンスは、トレーニングに残ったビラを空っぽにしてしまいたいという気持から、つい時間をオーバして捕まる。

連行されるとき、学生らに見つめられながら、だま、だま、で抵抗も声もあげなかった。

行動に当って、できるだけ細かく事態を想定しておくこと。何よりも日頃から「トレーニング」をしておくことが必要だ。

● (こ)しは教えてみたら、なんと五回もたのまれて

コーエン?にいった。

まえの日(は)仕事<sup>は</sup>を休んで

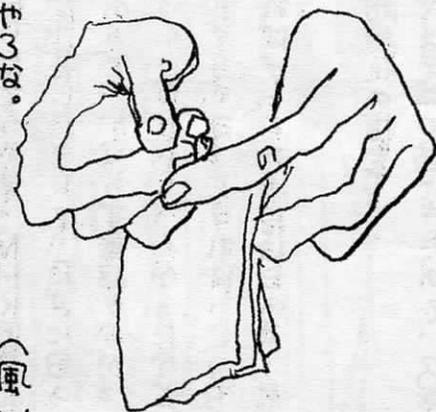
コーエン原稿書いたり

当日は汗かいたりで、

あんまりええもんやない。

● (こ)もかく八六軍は

えらい写やった。忘れへんやろな。



(風)